<ルポ>

肥後っ子関西へ行く

―就職列車同乗記―

ことしの中卒者の県外就職は約七千名。さる三月十九日の第一陣を皮切りに東京、中京、京阪神の各地へ向って、希望を乗せた就職列車は出発した。以下はその同乗記……

ホームは芋を洗うような大混雑だ。「しっかりやれよなァ」「礼状は忘れンごつ出せよネ」「来年の同窓会には必ず帰ってこいよ」見送りのクラスメートの学帽群が印象的。騒音の合間に「県民の歌」のレコードが聞える。発車のベルが鳴り出すと一瞬堰を切って激しいどよめきが起きる。カメラのフラッシュが乱れ飛ぶ。汽車は静かにホームを滑り出した。

車窓の仏舎利塔や熊本城がぐんぐん引離されて行く。さっきから学帽を顔にあてて車の隅っこに坐っている子が気にかかる。泣顔を見られたくないためか。

♣

どうやら興奮からさめた車内を見渡してみる。網棚から垂れ下っている「熊本県」と染め抜いた旗がまず目に止まる。男の子は殆んどが学生服に対して、女の子の大半は新調のツーピース姿。面白いコントラストだと思った。

車内はそれぞれ就職先別に分けて編成されており、お互いに出身校が違うため初めはみんなおとなしい。だがしばらくして大阪のR工業へ向う女子グループの方から「青い山脈」の歌声が聞えてきた。心なしか車内は急に和やかな話し声に包まれていったようであった。

歌声のグループの中に水俣中学卒の松本せつ子さん、田中はつ子さん、織田いつ子さんの三人の同級生グループがいた。織田さんは、「水俣駅を出る時はホームでの〝螢の光〟のメロディが悲しかった。でもお友達が一緒だから、淋しい事なんかありません」と顔を紅潮させていう。松本さんは姉さんが同じ大阪の紡績工場で働いている。就職先のR工業は学校の先輩もいるので心強い。「最初の給料は、家への送金や貯金をした残りから弟たちへ何かプレゼントしたい」と小さな手帳にメモしていた。高校に進学したくないかと聞いたら「家は兄弟が多いし、何より自分で技術を早く身につけて一人立ちになりたい。職場に入ったら夜間の通学もできるし、ひけ目なんか感じてない」とキッパリいい切った。隣に坐っていたスポーツ好きの田中さんは「就職したら直ぐ運動部に入りたい。休日には腹いっぱい大阪見物しよう」と、もうから張り切ってみせたので何となく気が楽になった。

♣

車窓に若戸大橋が夕靄にほの赤く見え始めた。北九州市は夜光虫のかたまりであった。ゆで玉子、みかん、キャラメル、アイスクリーム等々あきれる程みんなはよく胃袋に投入している。食べあきた組はトランプや詰将棋に熱中している。

各車輛には添乗の職業安定所職員がいて弁当の世話や細々した注意事項を与えたりして配慮は一応徹底しているようだ。すでに夜も深くなった。だが十一時過ぎたというのに眠りにつく気配もない。未だ興奮がさめやらぬのであろう。夜更けになって漸くあどけない寝顔があちこちに見られた。

♣

岡山あたりで真赤な日の出をみた。瞬間ビューンと擦れ違う急行電車に一同度肝を抜かれる。複線だなと珍しそうに窓から首を出す男の子。養護の先生（花陵中学橋本先生）が巡ってきた。車中での病気や事故に対する配慮として、今年から就職列車に同乗することになったもの。橋本先生は大した病人も出ず、乗もの酔、食べすぎ、それに眼に煤煙が入ったものが少数でやゝ期待はずれの態。「みんな温和しいですね」といって笑っていた。

♣

全員無事に大阪駅に着く。駅から電車で中之島公園の公会堂で開かれる受入式会場へ。求人側の人達がいっぱい出迎えてくれた。この会場でみんなはそれぞれの雇主に引き取られていく。

建築用軽金属で有名なM製作所へ赴く荒木勇君（出水中学）らの一行に同行してみた。向う仕立てのタクシーに分乗して製作所へ。M製作所は大阪城の近くだった。

工場の人たちに拍手で迎えられてみんなは一寸てれ気味。熊本出身の先輩達が大きな手で握手してくれた。主任部長の松井さんは「遠いところよく来てくれたね。疲れただろうね」と一人一人の肩を撫でながら父親の様ないたわり振り。

経理係のおばさんが「九州の人は色は黒いけど、みんなそろって好男子やなァ」と飛ばした。ので一同腹をかゝえて大笑いとなった。（広報課）

銀嶺に建つ愛の塔

阿蘇農高の献血運動

輸血に使われる血液は、大部分が血を売る人から買った血でまかなわれています。

そのために、血を売る人が常習化したり、貧血を起すというような問題が起っています。

そこで、こんな実情を一般の人々に知ってもらい、献血や預血返血というような方法による採血をひろめようというネライで、「愛の血助け合い運動」がいま全国的に展開されています。

ここに紹介する阿蘇農業高校は、この献血運動を生徒会が自発的に実践している学校の一つとして、全国的に注目されています。

愛の「献血碑」建つ

この学校の生徒会で献血運動に参加したのが昭和三十六年の九月で、今日までに供血した生徒の延人員は七百六十五名にも達しています。

この生徒会の愛の運動は、昨年五月皇太子殿下ご夫妻のお耳に入り、阿蘇にご登山の折、殿下は「全校挙げての献血は感心です。今後も続けて下さい。」妃殿下は「天皇陛下、皇后陛下には私からお伝えします。阿蘇農業高等学校ですね。」と親しくお言葉をかけられたのです。

生徒会ではこのことを記念するため、さる二月、自分達の挙金で「愛と献血の碑」を校舎の前庭に建てました。みかげ石の碑のおもてには、

〝見るがうちによみがへりゆく肌の色に捧げつる血の尊さを思ふ〟と皇后陛下の御歌が刻まれ、碑の裏には、阿蘇山上で皇太子ご夫妻に激励された感激を刻みつけてあるのです。

父兄の理解も深まる

採血は学業に支障のないよう

※に気を配り、試験前や体育祭などさけ、遠足や見学の時間に併わせて実施するように計画されています。このことについては、はじめの間は父兄の一部には反対の声もありましたが、この運動の尊さが理解された今では、むしろ誇りとさえ考えられるようになっています。

置時計は知っている

昨年の四月、長洲町の福浦さゆりさん（中学生）は、病床にあって阿蘇農高の生徒会の血液を輸血してもらいました。それがきっかけとなって、その後生徒会では寄せ書きをさゆりさんに贈ったり、手紙の交換もはじめました。

病床のさゆりさんにとっては、それが楽しい日課となったことでしょう。しかし、とうとう今年のはじめに、還らぬ旅に出てしまいました。

さゆりさんが亡くなる間ぎわに残した言葉は「阿蘇農高のお兄さんたちによろしく……」というひとことだったそうです。

それをお母さんから伝えきいた生徒会の全員は、献血運動の尊さに身のしまる思いがしたということです。

いま、生徒会の部屋には、さゆりさんのお母さんから贈られた置時計と、さゆりさんの写真が飾られています。

この部屋で生徒会の代表は「精神的にも肉体的にも清潔な献血運動として、今後も後輩に伝えて続けていきたい。又、若い世代の校友に呼びかけ、更に社会人となってからも、献血を続けていくつもりです。」と頬を紅潮させて話してくれました。※

頭のさがる思い

県薬務課長　福岡　珖夫

この話をきいて、ほんとうに頭のさがる思いでした。

今日では血を売る人が常習化して、血の質も非常に悪くなり、質の良いものが大へん不足しています。

欧米諸国では預血や献血運動が大へん盛んで、わが国のように輸血のたびに大さわぎすることはないそうです。

一般の皆さん方も、どうか献血運動の尊さをご理解下さいまして、第二、第三の阿蘇農高の皆さんのような方々が出られることをねがってやみません。

（衛生部）